

二〇二二年度学位授与式 学長式辞

卒業生のみなさん、本日はご卒業おめでとうございます。御父母の皆様もお慶びのことと存じます。心よりお祝い申し上げます。

三年前から拡大し始めた新型コロナウイルス感染症のもと、これまで経験したことがないような生活様式、外出自粛などの辛く苦しい状況の中で、さまざまな困難があったかと思えます。それを乗り越えられて本日のご卒業を迎えられたみなさんの努力に心から敬意を表し、お祝いの言葉を述べたいと思います。

大学での学びに際し、教えられることを記憶することだけでなく、自ら問題を発見し、解決していくことの重要さが強調されたかと思えます。いかなる学部学科で学ばれたかを問わず、各授業での課題レポート等の作成、その集大成としての卒業論文、卒業研究を通して、みなさんの知的能力は入学前に比べ各段に伸びているかと存じます。この成果を社会で生かしていただければと思います。大学で習熟された能力とは別に今後の社会生活のなかで鍛えていかなければならないものもありますが、その一つとして、ネガティブ・ケイパビリティという能力についてお話し、今後のみなさんの御成長に資することができれば幸いに思います。

ネガティブ・ケイパビリティという言葉は聞きなれないものかもしれませんが、私も帚木蓬生さんという精神科医で作家の著作で最近知りました。学校教育や職業教育で不断に求められる能力が問題を的確に対処し解決するものだとすると、その裏返しのもので、どのようにも決められない、宙ぶらりんの状態を回避せず、耐え抜く能力だとされています。村上陽一郎さんという著名な科学史家は、これをさらに敷衍し、ベストと思われる解決策がなかなか見つからないとき、何かしなければ、という思いにひたすら耐え、じっくり時間をかけることを厭わないという「能力」とされています。さらに、その課題そのものが視点を変えれば課題ではなくなるといふ方向性を見出したり、そうでなくてもベストの解決策などは本来ないのだからさしあたりこの途を執ることにするがいつでも引き返す準備だけはしておこうというような判断をとったりというようなこともそこから生まれてくるのではないかとされています。

我々は問題にでくわしたときに早急に解決を求めがちです。また、大学というところでは、単位をとるために期限まで果たさなければならぬ課題を課されることが多く、このようないわばじつと「待つ」という能力は期待されなかったかもしれないかもしれません。これからみなさんが就かれるお仕事の世界でも大半はそうでしょう。しかしながら、人生のさまざまな局面において、その状況にひたすら耐えることが求められる、それも耐えている間に解決への糸口が見つかる場合だけでなく、とことん耐えるということが必要になる状況もあります。帚木さんの御本のなかでは、心に問題を抱えて彼のところに訪れる方々のなかにはそのような接し方をしなければならなかった事例があったということも述べられていますし、私自身の経験でも不治の病におかされた肉親と暮らした期間についてまさにそのような状況で

した。社会全体についての問題でも複雑すぎて、どのように手を付けてよいかわからないといったケースに出くわすかもしれません。そのようなときにあせらず、大きく構え、持ちこたえていく能力、すなわちネガティブ・ケイバビリティを身に付けていることがみなさんを支えることになると思います。

これから先のみなさんの人生にはいろいろなことが起きるでしょう。ゆったりと構えあせらず物事に対処するということを覚えていらしてください。日本の古典というものもときによりことを言っているものです。今述べてきたことと一脈通じるところのある日本の古典の文章にしばし耳を傾けていただいて、お祝いの言葉を結びたいと思います。

今日はその事をなさんと思へど、あらぬ急ぎ先づ出で来て紛れ暮し、待つ人は障りありて、頼めぬ人は来たり。頼みたる方の事は違ひて、思ひ寄らぬ道ばかりは叶ひぬ。煩はしかりつる事はことなくて、易かるべき事はいと心苦し。日々に過ぎ行くさま、予て思ひつるには似ず。一年の中もかくの如し。一生の間もしかなり。

予てのあらまし、皆違ひ行くかと思ふに、おのづから、違はぬ事もあれば、いよいよ、物は定め難し。不定と心得ぬるのみ、実にて違はず。 『徒然草』 一八九段

今から七百年近く前に京都の僧侶が徒然なるままに書いた文章の一節です。人生において予測はしばしば裏切られる、だから予想通りはいかないものだと思っていると予想通りになることもある、このような人生の複雑なさま、定め難きさまを心に銘じ、大きく構えて人生という長い旅路を進まれてください。

みなさんの今後の人生に幸あれと願っています。

二〇二三年三月一日